



叔母、秘密の愉しみ。

叔母の住む近くにワンルームマンションを借りたのは、たんに大学に通学するためばかりではなかった。

ぼくと叔母は肉体関係があったからだ。叔母と示し合わせて大学も決めた。一人住まいを始めたのはもともとそのためだった。

あれは受験勉強をしていた時ことだ……。

叔母とぼくはもともと仲が良かった。姉のような存在で甘えていたところがある。

そんな関係で、母の実家 叔母はまだ結婚しておらず実家にいた に夏休みは受験勉強に専念するためひと夏を泊まり込んで過ごしたこともあった。

叔母はフィアンセもいて、実家から出ていく予定だった。真面目そうな男の人が手土産を持って、遊びに来ていた。熱心にアタックする男の人に、叔母は渋々結婚を承諾したようなところがあった。その秘密をぼくは、見つけてしまったのだ。

祖父と祖母は旅行に行つて、家にはいない時だった。ぼくは叔母の部屋に英語の辞書を借りに行き、本にはさまっていた写真を偶然見つけてしまった。

写真は叔母が全裸で縄で縛られている写真だった。どこか秘密クラブのようなところで数人の男に責められている写真。

中には自分で写したと思われる、少しピンボケした放尿写真や、オナニーをしている写真も混じっていた。

普段の叔母の姿がその写真に重なった。母もそうだが、

女兄弟ばかりの、巨乳の家系である。

祖父たちがいなくなっから、いやに叔母の普段着の露出度が多くなって、目のやり場に困っていたところだ。ぼくはいてもたってもたまらなくなつてある決断をした。

ぼくがその写真を隠していた辞書を開いて勉強していると、叔母は狼狽して問いただしてくる。

「あつ。その辞書どうしたの」

「叔母さんの部屋から持ってきたんだよ。勝手に部屋に入つて悪かつたのかな」

「そんなこと……。部屋に入るのはいいんだけど、その辞書には……」



これが隠してあると言いたいんだらうと、写真を見せた。別に叔母をそれで責める積もりはなかった。

だがあのSM写真の痴態が、頭に焼きついて離れなかつ

た。このままでとても勉強などできる状態ではない。だから叔母にはこの真相を打ち明けて欲しかった。

「ごめんなさい、びっくりさせちゃったでしょう。これはわたしと良ちゃんだけの秘密にしておいてほしいの」

叔母は自分がマゾであるかと告白した。その性癖をひたすら隠し、婚約者も知らないことだという。

だから人間的に良い人でも、なかなか結婚に踏み切れないのだと言った。

その人のセックスはとてもまともで、さらには淡泊だった。叔母はまったく感じないのだと話してくれた。

「わたし、マゾだから普通のセックスでは感じないのよ。でも、悪いからあの人には感じてるふりをしているんだけど、それが苦痛で他の理由をつけて別れて欲しいっていったことがあるの。でもあの人自殺するってわたしを脅迫するものだから……」

ぞんっこん惚れ込んでいたのは男の方だった。叔母はむしろ、そんな彼を哀れんで結婚を承諾したようなところがあった。

「でも、たぶん長くは続かないわ。わたし性欲も強い方だし」

こんな秘密を共有したせいかわ、叔母とはさらに親密になった。昔から仲が良かったが、セックスに関係する話題はお互いに避けていたところがある。

その垣根が壊れて、今まで以上に親密になった。

叔母も自分の秘密の性癖やら、それにまつわる体験談を語り、僕も思春期にオナニーを覚えた体験談やらガールフ

レンドとの初めてのセックスのことを話した。

それ以来、お酒を飲むとそういう話題に花が咲いた。叔母はビールが好きで、僕も良くつき合わされていた。

「どうしたの。最近、少し成績が落ち込んだじゃないの」「叔母さんのせいだ。あんな写真と話を聞かされたら、勉強に身が入る訳ないだろう」

むっとして言うほかに、叔母は困ったわねえといった。オナニーするだけじゃ、駄目なのと言う。

「そんなもの、よけい不満が残っちまうよ。俺は叔母さんとやりたいんだよ」



酒の勢いもあって言ってみたが、叔母には嫌がる素振り

は見えなかった。あれ以来、叔母はぼくのオナニーの手伝いをしてくれていた。

叔母が自分の手を使って、僕のペニスをしごいてくれるのだった。マゾであると言う秘密を守る代償だった。

だからなんとなく変な関係だった。叔母も満更ではなく、最近さらさら色っぽい。

オナニーをしていてくれる叔母の胸やパンティの中に手を入れても嫌がらず、お互いにオナニーし合う関係だったからだ。

だからぼく飛びかかっても、叔母はふざけているように思っていた。駄目よと言う抵抗は弱々しく、両手を縛り上げられて初めてぼくが本気であるのを感じ取った。

「駄目よ。これ以上は駄目。これ以上関係が深くなったら……」

「深くなったらなんなんだよ」

縛り上げた両手をベッドの端に括りつけた。こうすれば逃げる事ができない。

「駄目よ。駄目だったら……」

と言う声は、心なしか掠れており、叔母の瞳は何かを期待するように潤んでいた。

ぼくは叔母が隠し持っていたSMの道具を捜し出して、こっそり持ち出していた。

その中のムチを使って、叔母の体をうち据えていると叔母は身をよじって喘ぎ出した。「こうして欲しかったんだろう。はつきり言えよ」

辛そうな目で見つめながら、首を横に振りながら黙っている。次にやったことは、両足を開いてバイブレーターを叔母の秘処に挿入することだった。

手荒くねじりピストンさせると、耐え切れなくなって「ああ」とよがり声を上げ始めた。いったんぼくの手によってよがり声を上げると、堰を切ったように快楽の声を出して悶え出す。

はつきりと言えと執拗に責めると、「そうよ。良ちゃんに苛められたかったのよ。マゾの叔母さんの本当の姿を知ってほしかったのよ」と告白した。

もつとしてほしいかと言うと、「もつとして。叔母さんは、良ちゃんの奴隷よ。好きなだけ責めて」と言った。

やったと思ったが、ここまできて耐え切れなくなって、ぼくは叔母の秘処からバイブレーターを引き抜き、自分のモノを挿入した。

すぐにイってしまったが、叔母も少し遅れて達していた。



それほどに叔母にとっては、久しぶりのSMプレイだったらしい。声をあらげて「イク！」と言い、獣のようなう

めき声まで放っていた。

萎えかけていたペニスが何度も強く肉壁に挟まれて、少し痛いほどだった。

しばらく二人とも激情の余韻で、ぐったりしていた。やがて叔母が口を開き、縄を解いてくれといった。

「こうなることが怖かったの。でももう逃げないから、今度は叔母さんにさせて」

縄を解くと、叔母は萎えたぼくのペニスを口に含んだ。それも足の指や太ももを丹念にしゃぶったり、胸の谷間にはさんでしごいてからだ。

抜け落ちたバイブレーターを自分で挿入し、卑屈にオナる自分の姿をぼくに見せつけながらである。

何度もイキそうになったが、叔母の巧みなコントロールで気持ちさをさらされた。いつの間に主客が逆転してしまつて、叔母にすべてを任せていた。

アナル用のバイブをもつてくると、「こんなこともできない」と言いながら、アヌスに挿入して、横になる僕の体の上に騎乗位で乗った。秘処のつながり具合が見えるようにわざと腰を振って、ヨガリ達していった。

その日以来ぼくと叔母の関係はずっと続いている。叔母にとって甥との関係は特別らしく、背徳的な気分はSMPプレイでなくても十分に感じるらしい。どちらしても、叔母はぼくの性欲の処理道具となることに同意し、自分から奴隷契約書を作つてもってきた。

それによって、僕が命じるどんな破廉恥な行為でも、叔母は拒むことはできないのだった。要求不満が解消されたお陰で、見事に志望の大学に入学することができた。

叔母の勧めもあって、ワンルームマンションで独り暮らしを始めた。叔母は母親代わりに毎日のように世話をしにやってくる。

叔母は結婚し、今は平和だが幸せに暮らしている。

それは、つまらない性生活の不満を、ぼくとの関係で解消しているからだと言っている。

残りの作品は、製品版でお楽しみください。